

脳科学研究所講演会「ヒト親性の形成に関する心理・生理学的検討」

2020年12月10日（木）にZoomを用いて脳科学研究所講演会「ヒト親性の形成に関する心理・生理学的検討」をオンライン開催した。本講演会では、親が乳児の泣きへの反応性についてオキシトシンが果たす役割について行動実験、ホルモン解析、遺伝子解析を組み合わせた研究を福井大学子どものこころの発達研究センター学振PDの平岡大樹先生に報告していただいた。

（脳科学研究所 高岸治人）

〈開催日時〉 令和2年12月10日（木）17:00～18:30

〈開催場所〉 Web開催（Zoom）

〈講演者〉 平岡大樹（福井大学子どものこころの発達研究センター 学振PD）

〈講演要旨〉

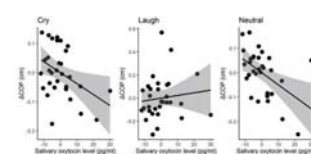
乳児の泣きは、養育行動という社会的行動を動機付け、乳児の生存や発達に寄与する。しかし一方で、育児ストレスや児童虐待の主要因でもある。泣きへの養育行動は広く哺乳類において見られるものの、霊長類以外の動物では主に皮質下領域の駆動による反射的なものと考えられているのに対し、ヒトではそれに加えて皮質領域の関与の重要性が指摘されている。これまでの自身の研究では、泣きに対する反応を形成する要因の解明を目指し、ひとつには動物研究で養育行動との関りが深く示されているオキシトシンに着目し、唾液オキシトシン濃度やオキシトシン受容体遺伝子多型と泣き声への反応の関連を検討した。一方で、認知的負荷をかける二重課題中の泣き声への反応の変化から、認知的制御機能が泣き声の処理に果たす役割を検討してきた。それらの研究の紹介を通して、泣きへの反応を基点とした社会的行動研究の可能性や、養育者支援などの応用可能性について議論したい。

ヒト親性の形成に関する 心理・生理学的検討

2020年12月10日
平岡大樹

唾液中オキシトシンレベルと乳児音声への反応

年齢を統制した偏相関係数



Hiraoka et al., 2020, CPNEC

17